



^ 13
3041
1



文刻堂壽梓目錄

民家分量記

常盤貞尚作全五冊
士農工商の力持心持
ひらきあけてきたり

俳諧寄進能

後月集全三冊
月次進加金玉の書
をたう

田舎狂子外篇

伏斎樗山作全六冊
虫考のこゝろに於いて人間
世に苦樂をこゝろ

俳諧閑の梅

後月集全三冊
得水書全二冊
百人一句に及ぶ

河伯井蛙文談

同作全三冊外篇の續あり
うゝのこゝろとの向答を以
同人乃心上に及ぶ

六道士會録

伏斎樗山作全五冊
古今勇士物語并法人
平生心づくに記

俳諧句靈寶

後月集全三冊
月次并取の句句ホ
あゝあゝのむ

初学消息集

玉並茂八筆
全三冊

正運紀畧

大窪茂吉作折本一冊
王代年号時世のまじり
をくくくる

宗分禪師語録

全三冊

天狗藝術論

伏斎樗山作全四冊
劍術の奥義を去り并
法義に深秘に論

画圖百花鳥

狩野探幽筆石中子写全
五冊忍本百紙さきき乃
去り并は寄句のむ

右出本に分り知せのこめ記也

江戸通本町三丁目 西村源六藏版

若林

へ13
304/
1-5

六道士會録卷之一

目録

松谿子艱難并各山鬼歌

三途川賞月詩歌

六道逢僧待歌

同勇士物語

守實義之徒

不貪義を立と徒

囚人警固を物語并心得事

門 へ 13
號 3041
卷 1

走込者かこひ物語

六道士會録卷之一
三箇月廿七日
本後子孫傳記
山鬼歌

昭和九年
七月二三日
購求

六道士會録卷之一

佚齋樗山著

松谿子艱難并卷山鬼歌

松谿子せうけいのあ者ある七月十六日さん残暑らん者志しのき

子あん縁ま先ま不出まて打まつて居まりて寝ま入まと

毛まれまく死まぬまともまかまく同ま眩ま息ま後まて井まの中まへ

陥ま家まりまてまおまほまえて是まちまくとまなりまらまに

險ま阻またるま右ま山ま上まへまあまりまてまはま百ま尺ま乃まま

漳ま雪ま樹ま天ま哉まさまへま尺まをま浴ませまばま子ま奴まのま魂ま崖まの

波ま石ま小ま激ま以ま羊ま腸ま路ま精まのまてま逸ま岩ま哉ま小まみま葛ま

六道士會録卷之一

藤小ころ付やうくふよまらのほほも張かん苦くい
 ぬらりれし首かぶをめぐらせば屋やせおくらへる
 者しや世せ運んの茶ちやをかぶる粟あは穂ほいゑほを麻あまのう
 ようけて荷こひゆくもあつと白しろありゆふは海うみをど
 馬うまふしそ業のりゆくもより不ふ思し義ぎふおをひ
 みちゆく人ひとふ心こへは是こゝに死し出での山やまあり我われくち
 釜かま中の旅せ餓が鬼きふ出で只ただ今いままうり久く家か者しや世せか
 つまといふ松まつ谿たに子こもどろきぬぬ真ま途ぢ此こゝ旅たびあつ
 我われいけ乃な君きみふ死しらるやんおほえび相あひも志こゝろぬる

へるれいぬとのれとるめくさつを
 ひらきくらあまらまに疲つかきなれい鬼きれんかよ
 橋はしをうき火ひを打うち付けたがさぬのそと居ゐる所ところ
 小こ谷や乃の底そこふてひららうなる色いろをうて津つち
 登のぼるりと唱な家かぬさうのぞきうこれこゝは九く足そく八はち面めん
 の鬼おにあつと登のぼ谿たにをろよ信まこととりの海うみへて
 おふあへありこまをさすふつりあるま
 谷やの底そこみみて鬼おにかんなくく一ひと息いき
 鬼おにやうくふふああるる家か登のぼ谿たにも雪ゆき山さん童どう子こ

汝乃の事、なちのし、生して、いふ鬼、辰所、カハ
 昆盧、遮那佛、おて、ま、ま、い、く、及、ひ、終、ん
 志、う、由、身、此、緝、會、よ、なる、ち、め、い、ま、く、なる、ま、是
 火、故、あ、う、つ、め、て、ま、ま、い、ふ、仕、い、と、て、懐、中、ち
 屋、ま、め、一、い、生、出、し、て、あ、る、え、を、北、鬼、奈
 怒、て、ま、れ、ハ、死、生、乃、山、ち、あ、り、お、の、ま、何、者、を、北
 赤、蓮、海、ど、所、は、交、の、ま、び、一、此、火、故、り、ら、ま、あ
 ち、く、せ、半、れ、つ、白、状、せ、ま、し、り、よ、ま、ま、に、查、察、を
 五、て、ふ、せ、鉄、持、を、く、い、ふ、お、あ、て、ま、れ、て、查、察、を

す、く、く、色、さ、さ、る、べ

お、り、い、ま、や、ま、ら、生、死、の、み、ら、あ、う、て

火、う、ち、か、ん、こ、と、な、い、ま、る、べ、一、と、ハ

實、也、目、小、み、え、ぬ、鬼、神、を、も、や、う、を、武、士、の、ま、
 ろ、と、も、な、く、さ、む、る、ま、只、和、歌、の、み、ら、あ、り、ら、鬼
 感、涙、を、い、ぬ、る、あ、ま、り、入、い、と、鉄、持、を、な、ま、を、ま
 て、助、を、さ、う、う、ら、ま、れ、て、查、察、を、う、ら、ま、し、ひ
 鬼、の、目、め、も、あ、ら、う、と、い、由、身、此、半、り、あ、ら、う、と、い、ま、
 く、い、ま、を、一、て、別、を、く、ら、り

三途川賞月詩歌

其よりあまこの難^{ちん}とあえて藤^ふ下^{した}まされむ
 さまざざ大^{だい}にゆり向^{むか}れ岩^{いわ}をえりせは牛^{うし}
 馬^{うま}の尻^{しり}さくをまきぬ^ぬ福^{ふく}の廣^{ひろ}さみてあは疾^{はや}と
 矢^やれごとく川の急^{いそ}小^こ媪^{おきな}あつ眼^{まなこ}焔^{えん}齒^は豁^{くわつ}み
 て杖^{つゑ}小^こをぐりてまきり杳^{せう}豁^{くわつ}立^たより亦^{また}乃^な名^なを
 口^{くち}へ媪^{おきな}回^{まわ}上のワ^のりり地^ぢ獄^{ごく}への途^{みち}なつ^つ中^{なか}れり
 さらは娥^が鬼^ま道^{ぢう}へのみちなつ^つ下^{した}をりり色^{いろ}
 玄^{ちん}田^く生^く乃^なへのみち^{みち}れつ^つ王^{わう}叔^{しやく}小^こ三^{さん}途^と川^{せん}といふ^い道^{ぢう}

残^{ざん}とも色^{いろ}こぬ^ぬ下^{した}くも^も深^せ海^{かい}とん^ん合^あく首^{くび}ごまの
 取^{とり}と命^{いのち}がむの務^む負^おみて歩^ありりあも^も正^{ただ}なり
 歴^{れき}くみまみみく^く後^{のち}にあふといふ杳^{せう}豁^{くわつ}あ^あ中^{なか}
 美^みより料^{りょう}足^{そく}六^{ろく}殘^{ざん}出^でて媪^{おきな}小^こあつ^つ媪^{おきな}回^{まわ}向^{むか}へ
 後^{のち}まは六^{ろく}乃^なれ^れ波^{なみ}あつ^つ王^{わう}叔^{しやく}小^こ三^{さん}途^と川^{せん}といふ^い道^{ぢう}
 て先^{せん}をさこの^{この}の^のあ^あを^を案^{あん}内^{ない}して^{して}此^{こゝ}こ^こう^うく^く
 ありきゆふ^ふ亦^{また}す^すひの^の小^こ娘^{むすめ}と^と神^{かみ}ん^んこ^こら^らは^はお
 へ^へみ^みを^を文^{ぶん}免^{めん}く^く出^でて^てり^りこ^こう^うく^く正^{ただ}なり^{なり}
 七^{しち}老^{らう}世^{せい}合^あわ^わく^くら^らより^{より}て^て罪^{ざい}障^{じやう}懺^{ぜん}悔^{かい}の^の物^{もの}こ^こ

了会仏題目を唱へしあつて親者經光明言
 八句の陀羅尼おのひくふよみまゝに内ふ一
 人查谿子り傳ふよる先刻より西人亦或うか
 ひるに俗をばみえ給ふよる月白く風清
 一心の内いづるりまゝにやんまはるる
 安波あみてちすゝ一俚語をも綴り為此いふ
 七者小ちりこれにて此風京哉貴せざん
 八あまりふを下ちりともく存してふ出しく
 一律を賦け

風帆適意三途渡 晴景惱情六道天
 雲吐銀盤河漢遠 江沉金玉水波鮮
 笙歌遥閑稱名裏 聖衆來迎觀念前
 可信一乘妙法力 誰知舌上即生蓮
 三洲のめぐりぬるに月すみま
 救世乃舟よのまのさやら
 查谿子此句哉吟どかしのちり笑て回を方
 はいまして天堂の伎樂を祓ぐひ給ふとん
 富を小素しては富を成りひ貧賤小

素してハ貧賤を以て夷狄患難君子ハ入と
 て自得せしむといふこと外に地獄天堂何乃棟
 扶することこのあらん我を亦信あつて方此
 越向と吳を王夫左陸の徳とるやさるるは
 危のるは盈をともも溢をば上弦を乾の下神
 法つて下弦を遊の上俤小效小浮雲光茂蔽
 とも散するると此を自若とらるる波影を揺るごと
 色委曲して垂るる照臨して法濁茂多々
 とれく櫻を催ひ足茂あつてひくすくをと推

うのふ一とびハ明くふ一とひを晦くして時の
 通密茂示一とひハ缺一とひハありかしてを
 の盛衰を見ひ嗚呼あま非ざることをまよの六
 韻を賦と

霄漢一輪月
 盈虚忘得失
 皎々如新浴
 高明能照物
 弓勢見神武

晴暉滿万川
 隱居與時迁
 臆々堪共憐
 閑雅誰爭妍
 鏡光示智圓

利名無繫意

對影思悠然

志のなる流よりくびくゆく舟の

月小棹さるこ途川の水

六道多僧詩歌

とくくして向れなる小玉流郊原渺こくして四
み涯際れく煙霧野をうみと塵沙面たうみか
み処小僧一人出来つと李谿谷てて曰汝ははく
に往んとするや 李谿曰 不知其所来

何不見其攸往

僧曰汝夙縁不固て人思よ

生流といへとも公不浄去故念せは口は佛名哉

唱みことれ一眾吉幸おほくはといへとも極樂

性生叶ひくこ一會あたまは地獄不墮土也

むのこ李谿曰 唱 乍麼生是地獄天堂

僧曰

よよひ来しを始めを志し波れ

くちくへ家庭まな故かへむ

李谿詩作りて答ふ

元来無物皆成物
 物去不知何處歸
 地獄天堂人世界
 落花片々任風飛
 極楽も地獄も波もぬまぐりの

身家も去るゆへに
 身もおほえは
 傍笑してさくさく
 不燈の光をさるる
 雲霧悦て
 尋ゆまきさりのぞ
 起んれ、奈の乗が
 り座あま
 武士とみえさるる
 者大勢あはまり
 居て志
 めやのふ物流まる
 神ちり、雲霧
 巻下口より
 入て新来の七若
 六道小迷ひいた
 るこの火を



一ツト下とをまじり亭主と見え侍りし
もや泉の長途に疲乏の少ん是へお
りてゆくも休息し給へとも茶漬など
ぬるまいたごをまじりていみじく出
あり

六道勇士物語 爰端

座上の人曰地獄中へはゆめゆめとても武士
不ひる後づけ徒居ハせぬものあり
と音何とて実合給ふ各ゆくる吐一の内

則ちも立廻き申あははははははははは
とる奥のしし一茶の奉加ちまじりし申
まれども積まば堂塔を建立に古き人の吐
と一又の、まゆ受てて後づけハ不意の變
不應して身れ用成なる大なる益あり
加の残り一度も用ふるもてちまじり古きを
吐し、幾度も用ふるもてちまじり古きを
色ゆ控申し、見へても高坐むごはれさし
合せに用給ふ加の残りを集めて捨棄

成る小用一かるべ一世間利害得失の性
 一を辨りて之を以て何の用哉なる乎
 此一といへば皆尤や感に扱はの人を以て
 家木の隣小を人あつる若き者とあはれめく
 云まはる心無使活小一く撓まざるん半故
 要は故亦人ち考ふ大丈夫乃志故善小通
 勇一とざる者は心考小困む心縮ひく困
 む時ち生て此を以て益れ一勇ハ血氣成以
 物と争ひ勝ことと法とむる一はあづる此

氣は心活して健小泰然として能決
 居まらることれくまふことなり天下れ大變小
 あふてま心精動まらずまきの後なりあ
 く心得く物よ迫ふべし其学官といふも乃
 と知て此心の自由成は使活小して内精動を
 家とれく困むことねらんがこめするり
 々々むむぐ不自由なるは学官何れを
 らん心迫ひく苦む者ハ盲人の足は不立の
 ごとくゆくことあはれまはるゆく事と云ふ

むいりりさくぐに似たり困るはくふを
べき極まりさぞちんまなはん

守実を以て徳

或人のいひく人ち実を以て要とし
忠といひ孝といひ今も根を失ふより先
依とのあり心乃実を失ひては中ず
なるがなりといふも實物あり根
故小者事と末途ふことあるは勇
実より出く依勇ハ始終撓むこと

血氣の勇を一旦剛強あり世いへども欲乃

とめ小動うさうこの又ち勇れ大半よ及

む事特心平なるふこのあり心変

者れ王梶原父子明智日向を介古来血

氣中ん勇者物ありへく死の死

きと以て知極一欲み動く者ハ

ち実を失ひ実をれちりなる者ハ

欲小動く者なり欲と実をハ相及

者なり

かどの勇上みは何方へ往てと尋り兼ふ
 事外し主人我を又出さるるを驚き能乃
 者坐おれど松小あしらとれ目のあぬま
 おもしるるるびをといひく立身此こあ
 代へゆくし事をより者ち母成去るざれ
 甚しきぬり亦ありむら人のこあ不働
 事の時バ浴吞童子と腕をく成去る
 く小おの目ご功成唱へあまき者おほし此
 半ハ彼の班鳩池田が字をゆてもと
 ことすちつと武士く者可怪事ちつと

ことすちつと武士く者可怪事ちつと
 囚人警言固く物説并心得事
 昔時雷田氏系ハ軍術小長ト徳大名
 旗本と外つ才満く故ありく御疑
 成業つと揚がよ越く時に何某とくや
 物成足軽小なることまを教固くしてゆ
 頃と出せばき人ならせり取めて何者
 とは志しる二百人なりり隠居く警言固
 へ成戦して我くも栗田虎つ才めて中

一十會 金卷一
げ交師へ一生の別をみては許を誓ひ對
面仕交旨中入家ある異儀あり、大勢を
いづいふへきいれいれ切て見へり警言固
の仁おとま議せし奇特なる由志しといふ
種由對面しつとせ中へくは近く由書あり
胸とよ成てて死すして妻物と志す所栗田
と妻物より出しく座せしめ我も栗田が右
の扱ふに添てせしと父めくききしゆは
み栗田を刺殺し死骸れ上りて後切て死ん

せとつとせめこれ物なつと才子どもがーあ
どは重く芝の上には居まれ、栗田一礼して何
れとせと乃由出由深情れ候、我も必存
しぬ所疑哉、幕つと揚別不越以後日は罪れき
子細あまううかお知くせまら由同不切候事也
届し皆く由海にといひく、妻物の内へ入まれど
才子共一面目ありて皆まうくと立てぬまり
警言固の仁れを志しつとさび、妻物れ右の方に
付添く栗田の傍哉一寸もれまじまくりち

足輕小五郎めさもて切せり宿小五郎て後
別儀しれ熱く囚人の警言固ここの此心得
つき事れ彼等と切合きあいは働大勢と切
伏しれ内小囚人うし切しきん小は主人
の越方ちりめなり其身そのも名故失小形力ち粉小
有りて囚人さへまは祈い警言固乃も意は
立事たまつ加極くわの事こと業ごうてま事ま事ま
熱して武士ぶし共とも愛小用もちべき抽とひ業ごう小支し友
去さくく重おもへま事まれり急いなる時ときも事ことおほくして成

かかままものものながら抽して用事れ抽ひ業ごう小支
度して重おもべきと古ふるまま人のいいるるれ又粟田
をさをいいららちちららばば時とき憤い満まんかんかん氣き父ふああららば
才さい子しごごもの心こををああららののうう躁そう動どういいへへ

老らう込こ者しやかかのの一い抽ひ緒しゆ

昔時大名むかしれ下くだ屋敷やしきああののららるる者しやああ
こそ屋敷へ人ひと切き討うちくる者しやととつつままここみみのの
ここいいととつつままのの中なかををああつつををああちちととの
ととるる者しや居いの方かたへへつつままゆゆくくるる者しや居いのの者しやを



向ひに補の内際分せんさくしつゝ一にたや
 うの共入へ中さすのあこうさしきとる者も
 水産あくのきあつを打中さへおあ出入乃
 者よまがたき入くる中を水産あべくのほれ
 うろくとしつゝ以内は各格大幣つあたとあ
 由せんさくしお通まごくお屏と兼裏の
 方へ逃出いも不存以下を補中を屏もひ
 きくお小水産の又屏下に藪をあつと金い
 下もおほく水産いた極しおより兼いお出と

おつへい務めいくも屋やまでせんさくしつて
 ちやうれもの居お中ちゆうの方かた先まへ一ひと若わか志しううさる
 中ちゆうあてら屋や補ほ乃の内うち一ひと海うみつつ屋や同どうふふけけ反はん抽ちゆう
 中ちゆうしつ家け中ちゆう妻さい子し一ひと祿ろく所しよとと由ゆ同どうみみりりををみみこ
 ととをを仕しつつままぐぐここくく上かみ大だい坊ぼう屋や改かいぬぬ内うちへへあ
 ここここささぐぐたたれれののままどど中ちゆうひひららいい家け中ちゆう者もの一ひと分ぶんささふ
 中ちゆうひひここ申まをたた得え得え大だい躁そう勃はつふふおお女にょここうういいまま人ひと
 といいまま人ひとのの出で入いふふ中ちゆう申まをししのの終しゆうつつハハをを符ふ抽ちゆう
 中ちゆうもも出でらら給たまひひままべべおお申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ

一ひと分ぶんささふふいいるる中ちゆうににおお果はいいととももまま人ひとへへのの不ふ忠ちゆうおお女にょ
 依よはは仕しつつままぐぐここくく上かみ大だい坊ぼう屋や改かいぬぬ内うちへへあ
 中ちゆうああるる申まをすすおおててのの途とちゆう中ちゆう申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ
 中ちゆうととはは遠とちゆうしし由ゆええうう一ひとままのの分ぶん各おの格かく申まをすすおおてて
 てて越こ度た申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ
 中ちゆう下かににくくええ地ちををききててまま人ひとととまま人ひとのの
 事こと恨いみみおお女にょ申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ
 中ちゆうゆゆへへ申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ
 中ちゆうちちのの申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ
 中ちゆうちちのの申まをすすおおててのの事ことととししたたぐぐいいふ

不中^レげ上^レては格も無^レ由^レ在^レぬは不^レ出^レ不^レ管^レを
 成^レの格母と神^レんご^レろふい^レひま^レれだ^レ追^レふの
 者^レもい^レふ^レ格^レも^レな^レく^レも^レ海^レも^レい^レふ^レこと^レを
 危^レ決^レぬ^レ人^レ乃^レ物^レ結^レな^レつ^レま^レは^レら^レお^レち^レよ^レご^レめて
 美^レく^レの口^レ上^レを^レと^レあ^レさ^レく^レた^レ香^レあ^レく^レは^レう^レさ^レま
 か^レく^レく^レそ^レ大^レ際^レか^レく^レの^レご^レく^レ寛^レ文^レの
 中^レの^レ事^レな^レる^レま

士會錄卷之一終

仕メ

